

社会的差別は、メディアなどの言説を通じて維持される。私は、言説に隠されたイデオロギーや価値観を批判的に分析することで、不利益な立場にある人々の救いと、公正な社会の実現を目指す研究に携わっている。

「ブラック・ライブズ・マター」や、「Me Too」などの社会運動の成果もあり、人種差別や女性差別に対する意識改革の機運が高まる一方で、まだ問題として認識されていない差別もある。例えば、年齢差別だ。私が最近注視してい

言説から読み解く年齢差別

とで、やがて常識として容認され、維持される。

ある日のネット上の言説を見てみよう。ある記事は柔軟性があり、前向きで、若作りせず、我欲がなくめつくない女性は、40代でもおばさんと呼ばれない、と述べる。別の記事は、ある女優の、透明感あふれる肌とスレンダーな体形を、40歳には見えない、と称賛する。

中年の女性芸能人のしわや二重顎を指摘し、激太り、劣化、と嘲笑する記事もある。「オバ見え」しないための服装を指南する記事、「おばさんは手と首元から」とうたう、40・50代向け「年齢サイン」ケア用クリーム の 広告、「キレイでいることで社会の需要も出

だ。これを仮に、「年相応に見えてはいけない」イデオロギーとしておこう。

中年女性は、容姿も行動も少なくとも若く見えないと、ネガティブな意味を含む、オバサンという呼称でくくられ、美の基準から逸脱した、貶(おとし)めるべき対象として繰り返し表象される。この社会構造により、私たちは、加齢を恐れ、年齢なりの老いが現れた身体を、価値を失ったものと自然に感じるように仕向けられるのだ。

では逆に、努力して、実年齢とかけ離れた若々しい容姿を保つ中年女性は、称賛の対象となるのか。話はそう単純ではない。彼女たちは「美魔女」と呼ばれ、時に揶揄(やゆ)や嫌悪を含んだ表象をされる。ある記事では、46歳の美容家が、「ババアのくせに自分をきれいに見せようとするな」「気持ち悪い」、などの言葉を浴びせられた体験を語る。ここにもられるのは、「年相応であれ」とするイデオロギーだ。

つまり、中年女性をめぐる言説には、「年相応に見えてはいけない」「年相応であれ」という、両立不能なイデオロギーが巧妙に内在し、中年女性はどのように在ろうと貶められるという構造があることがわかる。

加齢は誰にも避けられない。年齢を理由に人を差別的に語ることは、公正な社会にあるべきことなのか、考えてみてほしい。

中年女性の公正な表象を

るのは、中年女性に関する言説だ。差別的言説は、それが客観的事実であるかのように繰り返し語られるこ



名城大学 法学部教授 溝上 由紀

みぞかみ・ゆき 批判的言説分析、カルチュラルスタディーズ。名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻ヨーロッパ表現科学講座博士後期課程修了。1968年生まれ。

てくる」と髪のを勧め記事もある。これらの例から、一般に常識として共有される中年女性の概念が抽出できる。老化した肌や髪、丸くなった体、性格・行動に難あり、社会的需要なし。これらの言説が前提とする価値観を読み解こう。それは、若さとそれに付随する容姿を美の基準とし、年を取ることは醜くなること、加齢は抗い、うまく隠すべきもの、とする価値観

